

中国のほんの話(48)

## 『欲望大国』 でつかむ夢 ～中国で爆走する日本人～

蔭山 達弥

朝日新聞出版から発行されている『アエラ』（AERA）2010年1号は、「中国で爆走する日本人」と銘打って、中国市場と格闘する日本の男女6人を紹介している。

2004年にヤクルト（養楽多）に入社した斉藤与一さんは、上司と二人で北京入りし、現地で面接した中国人社員と一緒に飛び込み営業で乳酸菌飲料を売り込み、3年半で1,500店舗まで販路を広げた。タカラトミー（多美玩具）上海支社の関本康二郎さんは、春から始まる上海万博を前に、世界に向けた商品開発の第1弾として、中国版新幹線「和諧号」の模型化を進めている。関本さんより5歳も若い29歳の辰巳幸士さんは、2008年3月北京の繁華街・西単にユニクロ（優衣庫）再進出1号店を開き、「レジ待ち1時間」を演出した際の店長で、現在は上海・蘇州の区域経理だ。中沢玄士さんは、リクルート上海法人からカジュアル衣料大手のポイント（方針）に移り、上海1号店をオープンさせた。沖田京子さんは中国進出から30年を迎える日立中国公共関係部副総経理、家電から環境・省エネに事業のウエートが変わりつつある中国市場に向けて、夢を食べて生きる動物として中国の古典に描かれているバクをキャラクターとして採用した。園田純子さんはカーナビやオーディオ機器の生産拠点を次々と中国に移したパイオニア（先鋒）上海工場の生産管理第1課長だ。

パイオニアの園田さんが中国に来て、てこずったのは「没問題」（問題ありません）という言葉。そう言い切る部下ほど、仕事を任せておくと、報告してこない。聞いて初めて、トラブルを知る。上海へ語学留学ののち、現在は上海で中国人のライフスタイル、異文化コミュニケーションなど取材を続けている須藤みかさんは、『上海発！新・中国的流儀70』（講談社＋α文庫、2007）の中で、中国人が「没問題」を連発する訳について、こう述べている。

「何かを頼まれたり、指示を出されたり、気になることについて問いかけられたりした時など、中国人は自信を持ってこう返す。…中国人は最初から相手をだましてやろうなどと思って



いるわけではない。多分なんとかかなるだろうと楽観的に考えている場合もあるし、自分のメンツを保つために「没問題」と即答してしまうのである。」

同書は中国ビジネス初心者に贈る「等身大の中国と中国人」を理解するヒントが詰まっている。同じ筆者の『上海ジャパニーズ 日本を飛び出した和僑24人』（講談社＋α文庫、2007）は、上海で働くさまざまな年齢、職業の日本人へのインタビューを収録したものである。22人目に登場するのは中国語落語に挑戦する本学中国語学科卒業生、小倉伸裕君である。もう1冊、経済、科学からマンガまで日本と中国の間のさまざまな交流の場で活躍している人々100人を取り上げた『100人@日中新世代』（21世紀日中メディア研究会著、中公新書ラクレ63、2002）にも、昆劇俳優として活躍する傍ら、来日中国人俳優の通訳を務めるなど、日中演劇交流に携わる本学中国語学科卒業生、山田晃三君が紹介されている。

上海には世界で最も多くの日本人が住む。2007年に長年トップだったニューヨークを抜いた。上海の日本人長期滞在者は約5万人。上海に2校ある日本人学校は400人ペースで増え、現在は小中学生2,400人が学んでいる。中国に活路を求める日本企業は、欧米駐在員並みに選ばれた人間を中国にはりつけるようになってきている。2010年、日本はGDPで中国に抜かれる。世界中に「メイド・イン・チャイナ」製品が溢れる。だが、目が肥えてきた中国の消費者は品質にこだわり、「メイド・イン・ジャパン」を選ぶ。アジア、特に中国で戦えなければ、日本は生き残れないのだ。

かげやま たつや（教授・中国文学）